



Title	アメリカ映画に現れた「日本」イメージの変遷
Author(s)	増田, 幸子
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42255">https://hdl.handle.net/11094/42255</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	増田幸子
博士の専攻分野の名称	博士(言語文化学)
学位記番号	第15695号
学位授与年月日	平成12年8月7日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	アメリカ映画に現れた「日本」イメージの変遷
論文審査委員	(主査) 教授 藤本和貴夫
	(副査) 教授 仙葉 豊 助教授 森 祐司

### 論文内容の要旨

映画は、およそ100年にわたって、動く映像メディアとして、あるいは芸術や娯楽として、人類の歴史とともに発展してきた。高度な情報化社会が成立し、バーチャルリアリティなどについて議論される昨今、映像がその受容者に強いインパクトを与えることを疑う人はいないであろう。特に、映画は現実に極めて近い形象を提示しながら、スクリーン上に「虚構的事実」を展開し、それを虚構として承知しつつオーディエンスが受容するという相互の前提のもとに発展してきたメディアである。しかも、現代のようなさまざまなチャンネルを通して情報が世界中を行きかう以前から、映画は、人々のものの考え方や価値観、世界観の一部を形成するための有力な装置の役割も果たしていたといえる。

本論文では、アメリカ映画の中の「日本人」の描かれ方を、100年のアメリカ映画史の流れに沿って、分析した。アメリカ映画の歴史や世界情勢、とりわけアメリカと日本の政治的歴史的関係を軸に、映画の草創期から第二次大戦前まで、第二次大戦中、大戦後から現在までと、三つの歴史的なカテゴリーにわけ、ジャンルなどのおのの時代に代表されるアメリカ映画の性質を考慮しながら、分析を試みた。本論は4章から成る。以下でその概要を述べる。

第1章では、1910年代のサイレント期のアメリカ映画において、「日本人」というマイノリティを、当時の銀幕のスター、メアリー・ピックフォードと早川雪洲が演じた作品 *Madame Butterfly* (1915)、*The Typhoon* (1914)、*The Cheat* (1915) に焦点を当て分析し、それが「日本人女性」と「日本人男性」のイメージ形成の鑄型になり、人々の頭の中に刻印されたことを述べた。当時は映画が新しいメディアとして発明され、大衆の支持を受けながら発展している時期であり、欧米社会にはジャポニズムという文化的な流行があった。そして、それとともに、日露戦争によって日本国家が世界の列強の一員に成り上がるという政治的な状況もあった。

「日本人女性」のイメージは、日本の開国前後に訪れた西洋人男性の記録や小説などの文字メディアによって、「蝶々夫人」のような「神話」を早くから創り上げており、それが演劇やオペラ、そして映画へとメディアをかえて、そのエキゾティシズムを洗練させ、生きながらえてきた。一方、日本人男性は、早川雪洲が悪役でハリウッドのスター・ダムにのしあがったことで、野蛮・洗練、突出・静寂というような二極化したイメージを、アメリカ社会に植え付ける結果となった。この矛盾した相反するイメージの同居は、西欧諸国から見た、当時の国際社会の中の日本国家の姿を象徴しているといえるだろう。この時期のイメージの作られ方と蔓延の仕方で注目しなければならないのは、アメリカの映画が見せ物小屋から出発し、移民たちの安上がりの娯楽だったということ、そこには「異なるもの」への大

衆のまなざしが常にあったこと、そして、ハリウッドという大衆娯楽の生産工場の「スター」によって、「日本人」というマイノリティが演じられたことである。これは、映像メディアの力と相伴って、そのイメージを人々の頭の中に刻印することになったのである。

第2章では、黄禍の恐怖が薄らいだ、第一次大戦後から第二次大戦勃発までの1930年代の数年間に、アメリカで流行した、東洋人を主人公にしたB級の刑事映画を中心に分析した。それは、それまで悪人としてしか描かれなかった東洋人男性が「チャーリー・チャン」「ミスター・モト」という賢い正義の味方として登場し、そのキャラクターがシリーズ化されたものである。「チャーリー・チャン」は、なまず髭の大柄な50代の中国人刑事で、その言動は、悠長で馬鹿丁寧、東洋の格言を連発するというように描かれている。一方、「ミスター・モト」は、眼鏡をかけた小柄な30代から40代の日本人男性で、懇懃で冷静、変装や武術を使って事件を解決する人物である。この二人の共通点は、風変わりであるが、「東洋の知」を備えた優秀さがあり、肯定的なヒーローのイメージを持っていることである。かつての邪悪な東洋人男性をこのように肯定的に描いたことは、確かにこの時期のハリウッドの新しい試みであったと言えるかもしれない。だが、ハリウッドのスタジオの経営困難を救う一つの「商品」として、安く早く製作できるジャンルの「東洋人刑事」ものは、当然パターン化され、単純化されていった。しかも、この東洋人刑事の役を、つり目と黄色いドーランをぬったイエロー・フェイスのメイクアップをした白人俳優が演じたことは、オリエンタリズムの系譜になって、受け継がれていったと考えられるだろう。つまり、チャンもモトも、アメリカ人にとっては解釈され、翻訳されて、彼らの中ではじめて成り立つキャラクターであり、それはアメリカ社会が理解し、必要とした「東洋人」のイメージを反映しているのである。

第3章では、太平洋戦争勃発の1942年から戦争終了の1945年の間に、製作された商業用戦争映画16本を中心に、戦争時の「敵」のイメージを探った。「敵」が醜悪なものとして描かれることは、いつの時代も普遍的なことであり、戦争という最も過酷な他者との対峙は、単純だが極端なイメージを創り出す。この章で見たのも、従来から中国人・日本人が持っていた否定的なイメージを結集させて作られたものであり、一部には「日本人」的なものも含んでいた。それは、真珠湾奇襲攻撃に由来する「突出性」「裏切り」であると言える。また、この時期に、東洋人全体のマイナス・イメージが日本人に、プラス・イメージが中国人に割り当てられたのも特徴である。若い兵士の訓練用や一般市民向けのプロパガンダ映画が存在する一方で、ハリウッドでは商業用・娯楽用としての戦争映画も数多く存在し、この時期に、「戦争映画」というジャンルが大きく発展することにもなったのである。これらの戦争映画に登場する日本兵は、日系人は収容所におり、事実上日系の俳優がいなかったので、中国系を中心としたアジア系の俳優によって演じられている。そのため、風俗考証がいい加減で、奇妙な日本語が飛び交う日本人同士の会話が数多く登場し、このような製作方式はのちのアジアを扱った作品作りに、負の遺産を残すことになった。

第4章では、戦後から現在までの「現代の日本」を舞台としたアメリカ映画23本をテクストとして、日本人のイメージを「日本人女性」と「日本人男性」という二つの観点からまとめてみた。戦後のアメリカによる占領期、反共・冷戦時代、日本の経済成長と日米間の経済摩擦など、日本とアメリカの間の国際的、政治的、経済的関係によって、そのイメージは主に「日本人男性」に反映されることが示された。「日本人女性」は日米の利害関係の及ばない芸術的・精神的な分野を反映しており、作品中には、アメリカ人主人公の恋の対象となって現れる。これは、いうまでもなく、「蝶々夫人」の神話に基づいた日本人女性のイメージを現しているが、時を経るに従って、「着物」「従順」「薄命」などのオーソドックスなイメージは露骨に現れなくなってきた。だが、「もてなす」「いやす」という「ゲイシャ」のイメージに内包されていたキイ・イメージとも言うべきものが、巧みに再構成されて、映像に反映されているのも事実である。「日本人男性」についても同様で、「勤勉」で「聰明・ずる賢い」性質や、不可解を伴った「突出性」「自己完結性」のイメージを、サムライ・ヤクザ・サラリーマンというように同一線上にのせて、反映させている。これらは、過去に刻印された核とも言うべきイメージを、時代のコンテキストによって、部分的に修正したり、再構成したりしてできあがったものであろう。「ゲイシャ」のルーツを持つ日本人女性と、「サムライ」のルーツを持つ日本人男性のイメージは、微妙にゆれを見せながら、そのキイ・イメージは連綿と生き続けているのである。

古いイメージを下敷きにして、新しい（新しく見える）イメージを生産していくのは、映像メディアの得意とするところでもある。アメリカ映画の世界規模の流通力を考えると、その影響の強さを危惧しないわけにはいかないが、mass を対象とした映画には、ある種のイメージを創り上げ、その流布に貢献するということは避けられない性質で

あるともいえよう。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、アメリカ映画の中に登場する日本人が、1910年代のサイレント映画の時代から今日までどのように描かれてきたかに焦点を当て、そのイメージの変遷を通じて、アメリカ映画という映像テクストに表現されたアメリカの日本人観の変化を明らかにしたものである。

筆者はアメリカ社会における映画の位置の変化、日米両国をとりまく国際関係や両国関係の推移といったグローバルな視点を保つつつ、映画の草創期から現代までを、第二次大戦前、大戦中、大戦後の3つの時期に区分し、それぞれの時期に制作されたアメリカ映画に特徴的な日本人イメージと全期間を通じて変わることのないイメージを取り出し、それぞれに的確な解釈を与えていた点が高く評価できる。

筆者は、アメリカ映画の中の日本人像を解明するため、アメリカのアーカイブなどを徹底的に調査し、多くの関係映画を新たに発掘した。またそれらを実際に試写し、それぞれの映像を綿密に分析している。さらに日本人だけでなくアジア系の人物を主人公とする数多くの映画を新たに議論に取り込み、その中で、日米関係の悪化がアメリカ映画における日本人イメージの悪化と、日本人以外のアジア系人物のイメージの改善をもたらした意味をも明らかにしている点も評価できる。

さらにこの論文の貢献は、日本人一般ではなく、アメリカ映画における洗練と野蛮の同居という二面性をもつ日本人男性と、「蝶々夫人」に代表される日本人女性に対するイメージの違いがもつ問題をも検討したことである。

勿論、これらの問題については、映画というジャンル以外にも明治以来多くの先行する日本人イメージの形成があり、これら主としてヨーロッパ系の人々の言説とハリウッドで作り出された大衆的娯楽としてのアメリカ映画におけるイメージの違いの意味がさらに追求される必要があるなど、いくつかの問題は残されている。

とはいっても、本論文のすぐれた成果は損なわれるものではない。本審査委員会は本論文を博士（言語文化学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。